

2021年3月期決算説明資料

株式会社ゼネラル・オイスター
(3224)



2021年6月7日



1. 2021年3月期 決算 トピックス



1

2度の緊急事態宣言などに伴う店舗休業等の影響により大幅な減収（前年比65.4%）

店舗事業の売上は、Webの予約システムの改善などで、予約数も順調に増え、9月は対前年で89.3%、10月は98.2%にまで回復したが、1月からの二回目の緊急事態宣言の影響で、再び売上が大幅に落ち込んだ。

2

売上高が一旦回復に向かった第3Qは、コスト削減効果もあり、黒字化を達成。

第3Q（10～12月）は、通常営業の再開により売上高が対前年比82.6%にまで一旦戻ったことや、コストコントロールを効かせたwithコロナの経営スタイルへの移行（損益分岐点の引き下げ）により、四半期ベースでの黒字化を達成。

3

コスト抑制により損失の最小化を図るも、コロナ禍の長期化に伴う影響と、減損損失（約4.1億円）を保守的に計上したことにより、最終赤字は6.4億円。

加工事業の工場に対して減損処理（約4.1億円）を実施。その結果、最終赤字6.4億円となり、債務超過1.1億円を計上。

4

8月に立ち上げた「EC通販事業」が急拡大。新たな販路確立に向けて大きな弾み

巣ごもり需要の取り込みにより「EC通販事業」が急拡大。まだ小規模ながら、新たな販路確立に向けて大きな弾み。

5

世界初のウイルスフリーの牡蠣の陸上養殖の特許技術が、台湾、アメリカ、中国でも取得

沖縄久米島で取り組んでいる、世界初のウイルスフリーの牡蠣の陸上養殖の特許が日本以外で、台湾、アメリカ、中国でも承認。現在、他の地域にも申請中。今後の世界展開へ知財を確保。

Withコロナの経営体制

経営基盤の強化とコロナ禍での売上確保に向けて、守りと攻めの取り組みを進め、筋肉質な体制に移行できていたが、4Qは緊急事態宣言の再度発令で、売上が大きく落ち込み再び赤字へ

	1Q			2Q			3Q			4Q		
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
既存店 売上高 対前年比	7.6%	13.9%	62.3%	70.3%	67.5%	89.3%	98.2%	90.3%	68.6%	44.6%	68.9%	123.0% 72.6% (対前々比)
店舗 状況	<ul style="list-style-type: none"> 4月からの緊急事態宣言で、多くの店舗が休業 緊急事態宣言解除後、徐々に店舗再開 			<ul style="list-style-type: none"> 7月下旬からコロナ禍の再拡大（第2波）により、多くの店舗が時短営業 			<ul style="list-style-type: none"> 9月以降順調に回復 11月下旬からコロナ禍の再拡大（第3波）により、再び時短営業 			<ul style="list-style-type: none"> 1月には、緊急事態宣言（第2回目）が再度発令 首都圏を中心に時短営業 		
取組 内容	<ul style="list-style-type: none"> キャッシュアウト削減の観点から店舗及び、全国の拠点（センターや加工工場等）で機動的な稼働体制へ転換 			<ul style="list-style-type: none"> 通販（EC）サイトのスタート 店舗のネット上の顧客とのアクセス環境の整備（web予約システムの改良、検索サイトの構造化への対応） 			<ul style="list-style-type: none"> 非接触型の店舗運営のテストをスタート（QRコードによるオーダーシステムの準備や、OPCポイントのチャージ機能の開始） 			<ul style="list-style-type: none"> 時短営業下での徹底したシフトコントロールの実施 配膳・運搬ロボットを一部店舗で導入し、営業効率の最大化を図る。 		
四半期 営業利益	△213百万円			△76百万円			+31百万円			△100百万円		
	大幅な赤字の計上			1Qより赤字幅が大幅に減少			黒字化達成			第二回目の緊急事態宣言により赤字幅の拡大		
損益分岐点を引き下げ、withコロナに対応した経営体制に改善												

連結損益計算書概要（累計）①

通期では、コロナ禍の影響により大幅な減収減益となり、損失幅が拡大。
 ただ、コスト抑制による損益分岐点の引き下げ等により、第3Q（10～12月）は黒字化を達成。

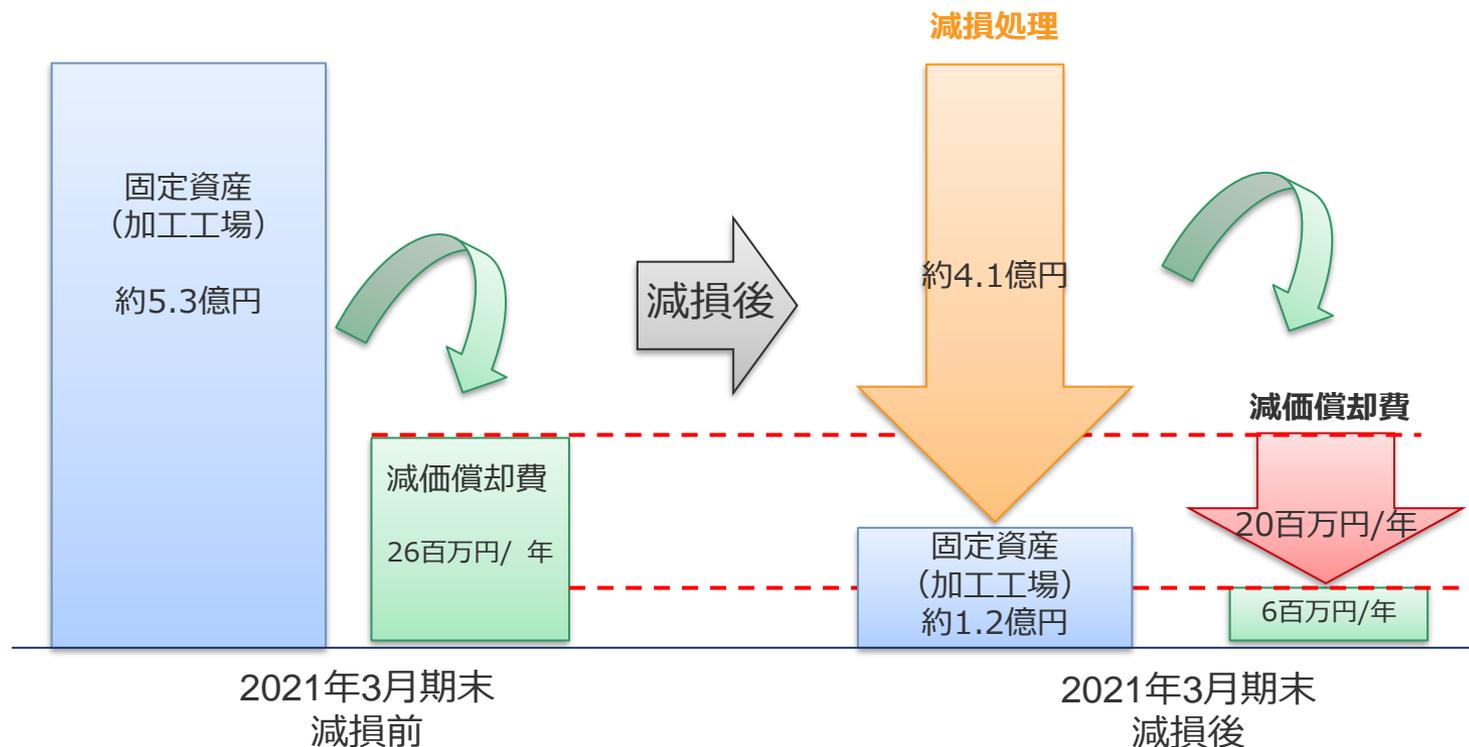
（百万円）	2020年3月期	2021年3月期	増減額	ポイント
売上高	3,579	2,338	△1,241 (-34.6%)	・店舗事業、卸売事業ともに コロナ禍の影響を受け、 前年比34.6%減の減収。
売上総利益	2,359	1,512	△847 (-35.9%)	
販管費	2,505	1,871	△634 (-25.3%)	・売上減に対応するためコスト 抑制の取り組みを実施、前 年比634百万円の削減を実現
営業利益	△146	△359	△213	
経常利益	△157	△367	△210	
特別利益	0	114	+114	・時短協力金など
特別損失	0	△410	△410	・加工工場の減損損失を計上
親会社株主に帰属する 当期純利益	△106	△641	△535	

特別損失について

加工工場の固定資産を保守的に見積もり、約4.1億円の減損処理を実施。
それに伴って、2022年3月期以降の減価償却費は年間約20百万円減少する見込み。

今般、減損の対象となった岩手県大槌町の加工工場につきましては、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、店舗事業の売上減少により、稼働を大幅に抑制しておりました。

今後は、当社加工工場において、新たに受託事業を開始し、稼働状況等を改善し、収益力が高まると見込んでおりますが、コロナ禍の経営環境を踏まえ、減損テストの当該将来キャッシュフローについては、保守的な見積もりとしております。



連結損益計算書概要（四半期推移）②

年間を通じて、コロナ禍による売上の大幅な落ち込みからがあり1Q、2Q、4Qは、減収減益。
第3Qは減収ながらコストコントロールが効き、黒字化を達成。

	第1四半期（4月～6月）			第2四半期（7月～9月）			第3四半期（10月～12月）			第4四半期（1月～3月）			通期		
	2020	2021		2020	2021		2020	2021		2020	2021		2020	2021	
	実績 (百万円)	実績 (百万円)	前年比 (%)	実績 (百万円)	実績 (百万円)	前年比 (%)	実績 (百万円)	実績 (百万円)	前年比 (%)	実績 (百万円)	実績 (百万円)	前年比 (%)	実績 (百万円)	実績 (百万円)	前年比 (%)
売上高	803	231	-71.2	922	673	-27.0	1,057	874	-17.3	795	560	-29.5	3,579	2,338	-34.6
売上原価	280	94	-66.1	333	246	-25.9	345	301	-12.9	261	184	-29.5	1,219	826	-32.2
売上 総利益	523	136	-73.9	589	426	-27.7	713	572	-19.5	534	376	-29.5	2,359	1,512	-35.9
販管費	594	350	-41.1	647	502	-22.4	658	542	-17.9	602	476	-20.9	2,505	1,871	-25.3
営業利益	△71	△ 213	-	△58	△ 76	-	54	31	-40.5	△68	△ 100	-	△146	△ 359	-
経常利益	△70	△ 212	-	△58	△ 82	-	45	28	-36.8	△72	△ 100	-	△157	△ 367	-
親会社株主に 帰属する 当期純利益	△63	△ 206	-	△49	△ 20	-	54	38	-28.0	△47	△ 453	-	△106	△ 641	-

貸借対照表概要

コロナ禍の長期化に備え、長期借入金により手元流動性（5.4億円）を確保。
経常赤字は続いたが、コスト抑制や助成金により現金流出は限定的。

(百万円)

資産の部	2020年3月期 期末	2021年3月期 期末	負債・純資産の部	2020年3月期 期末	2021年3月期 期末
流動資産	347	771	流動負債	778	635
現金及び預金	124	541	支払手形・買掛金	101	73
売掛金	111	146	短期借入金 ^{*1}	349	336
棚卸資産	94	27	その他	328	226
その他	18	57	固定負債	514	997
固定資産	1,218	745	長期借入金 ^{*2}	67	577
有形固定資産	989	520	その他	447	420
無形固定資産	2	0	負債合計	1,293	1,633
投資その他の資産	227	225	純資産合計	272	△116
資産合計	1,565	1,516	負債純資産合計	1,565	1,516

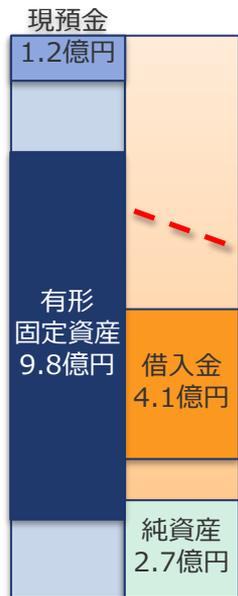
*1．1年内返済予定の長期借入金及び1年以内に償還予定の社債を含む

*2．社債を含む

純資産の状況

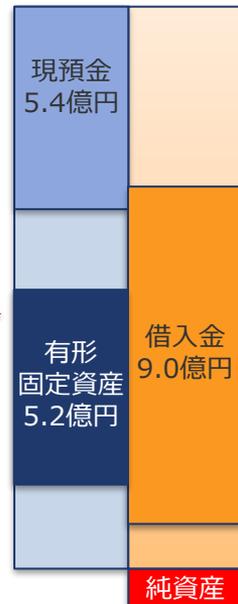
減損処理（約4.1億円）の実施により、2021年3月末で約1.1億円の債務超過を計上。2021年4月、5月において新株予約権の行使が進み、約1.2億円の増資が完了しているが、引き続き財務基盤の強化に取り組む

2020年3月末
連結貸借対照表



加工工場の固定資産を評価上4.1億円を減損処理。
期間損失2.3億円と合わせ、当期純損失6.4億円を計上

2021年3月末
連結貸借対照表



△1.1億円

2021年4月～5月の
新株予約権による増資

第8回新株予約権の4月1日～5月末日の行使状況

行使数：1,500個（15万株）
調達額：1.2億円

増資

1.2億円

*大幅に簡略化してイメージを記載

引き続き、資本政策の検討と損益改善の推進により、財務基盤の強化に取り組む

セグメント別業績概況

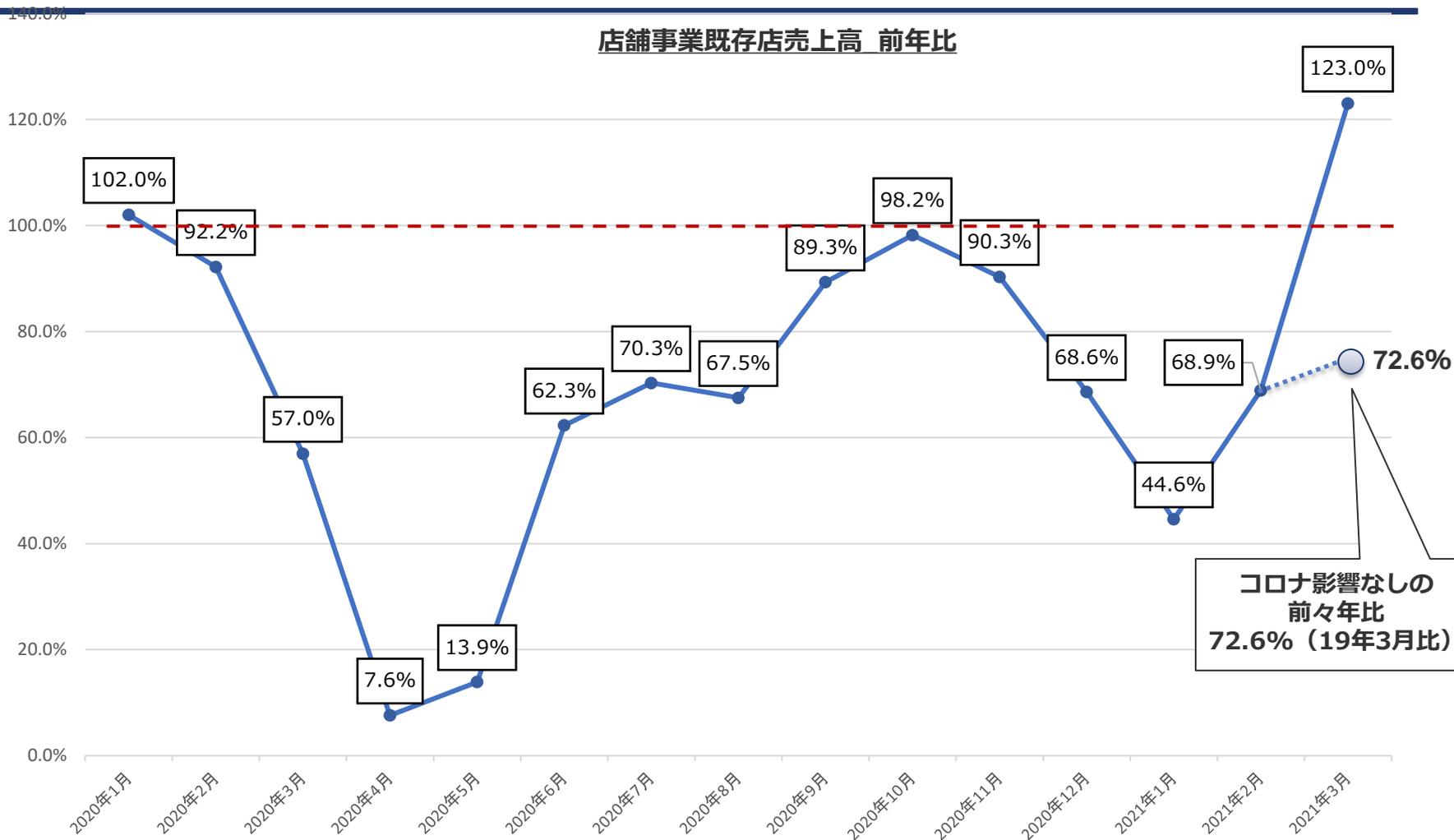
コロナ禍の影響を受けて、「店舗事業」「卸売事業」とも、減収減益。
特に、国内の「卸売事業」は、販売先の休業などもあり、売上高が40%減と大幅に縮小。

(百万円)		2020年3月期	2021年3月期	前年比 (%)	ポイント
店舗事業 オイスターバーレスト ランでの飲食サービス	売上高	3,271	2,152	-34.2	コロナ禍に伴う店舗休業等により、減収減益。売上高は前年比34.2%減に落ち込み、利益面ではかろうじて黒字を確保。
	営業利益	318	7	-97.8	
卸売事業 生牡蠣や牡蠣の加工 品の外販卸売り	売上高	280	168	-40.0	取引先もコロナ禍の影響を受けており、取引高が40%減と大きく減少。
	営業利益	116	51	-56.0	
その他 イベント事業、 種苗事業	売上高	27	17	-37.0	
	営業利益	17	0.5	-96.8	
調整額 生牡蠣用の浄化セン ター、陸上養殖、加 工事業、本社など	売上高	—	—	—	全国の拠点で、コストコントロールが効き、前年より経費を181百万円減らすことができた。
	営業利益	△598	△417	—	
連結財務諸表 計上額	売上高	3,579	2,338	-34.6	
	営業利益	△146	△359	—	

【店舗事業】 既存店売上高 前年比の推移

9月、10月と順調に回復していたが、11月下旬以降はコロナ禍の再拡大（第3波）に伴う時短営業等により失速。

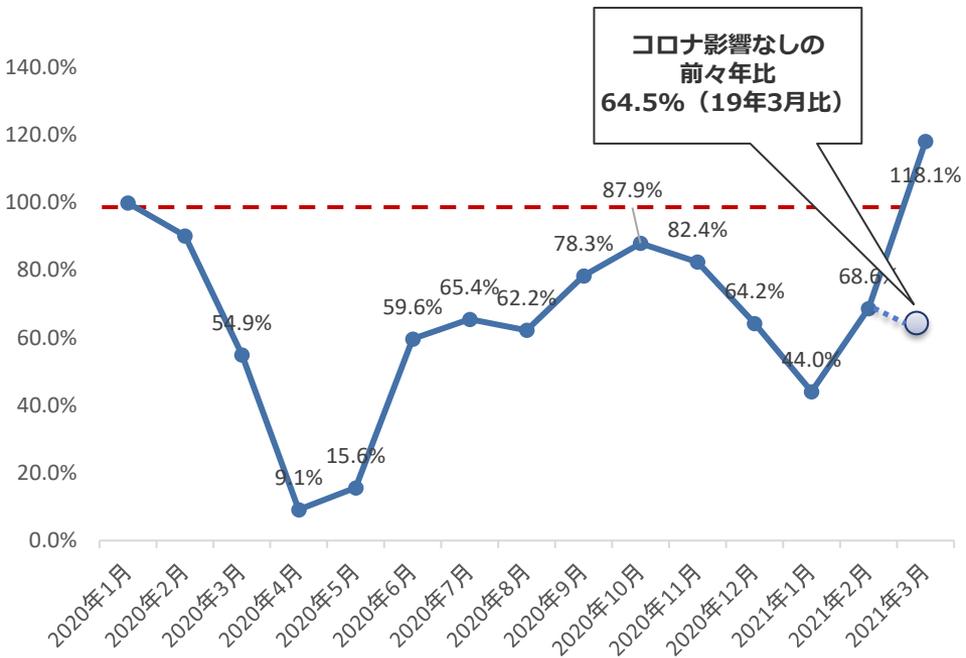
店舗事業既存店売上高 前年比



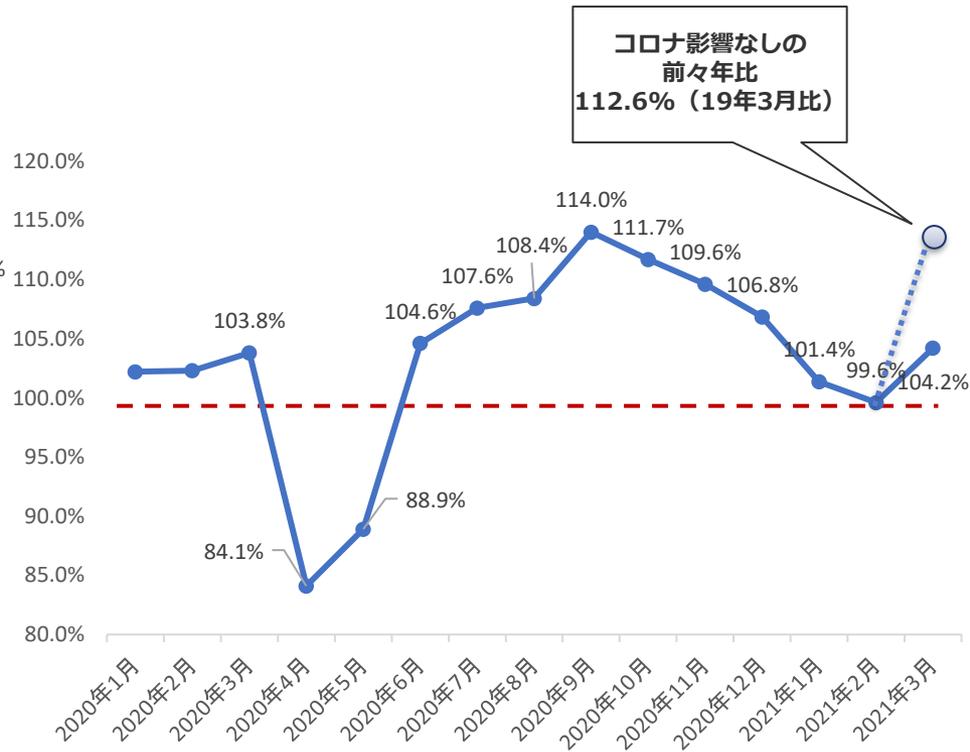
【店舗事業】 既存店客数・客単価（前年比）推移

営業時間の短縮等によりディナー帯の客数が大きく落ち込む一方、コロナ禍におけるライフスタイルの変化に伴ってランチの高単価化が進み、既存店の客単価全体の底上げに貢献。

店舗事業既存店客数 前年比



店舗事業既存店客単価 前年比



【新規事業について】

総合商社との間で、加工事業での水産加工品の受託業務に関する取引について合意。コロナ禍で落ち込んだ稼働をカバーするとともに、新たな収益源の確保に向けても大きな進展。

岩手県にある加工場で受託生産を行なうもので、これまでのカキ加工品からすそ野を広げ、その他の原料も取り込んだ水産品全般の生産に着手します。コロナ禍により、主力業態の外食事業が苦戦を強いられる中、新たな収益源を確保するもので、大きな進展となります。

これまで培ってきた生産技術や設備を生かし、さらなる業容の拡大を目指して工場の有効活用を模索していましたが、今回、品質面を含め、安定した委託先を探していた商社さまの要望に合致しました。

この商社さまは、グループ会社を通じて食品加工を行なっていますが、現在その需要が伸びており、今回の合意ではその供給を担うこととなります。

また、今回の事業拡大のため、スタッフを1年以内に新規で15人程度の採用を計画しており、雇用創出を含めた、地域への貢献も目指していきます。

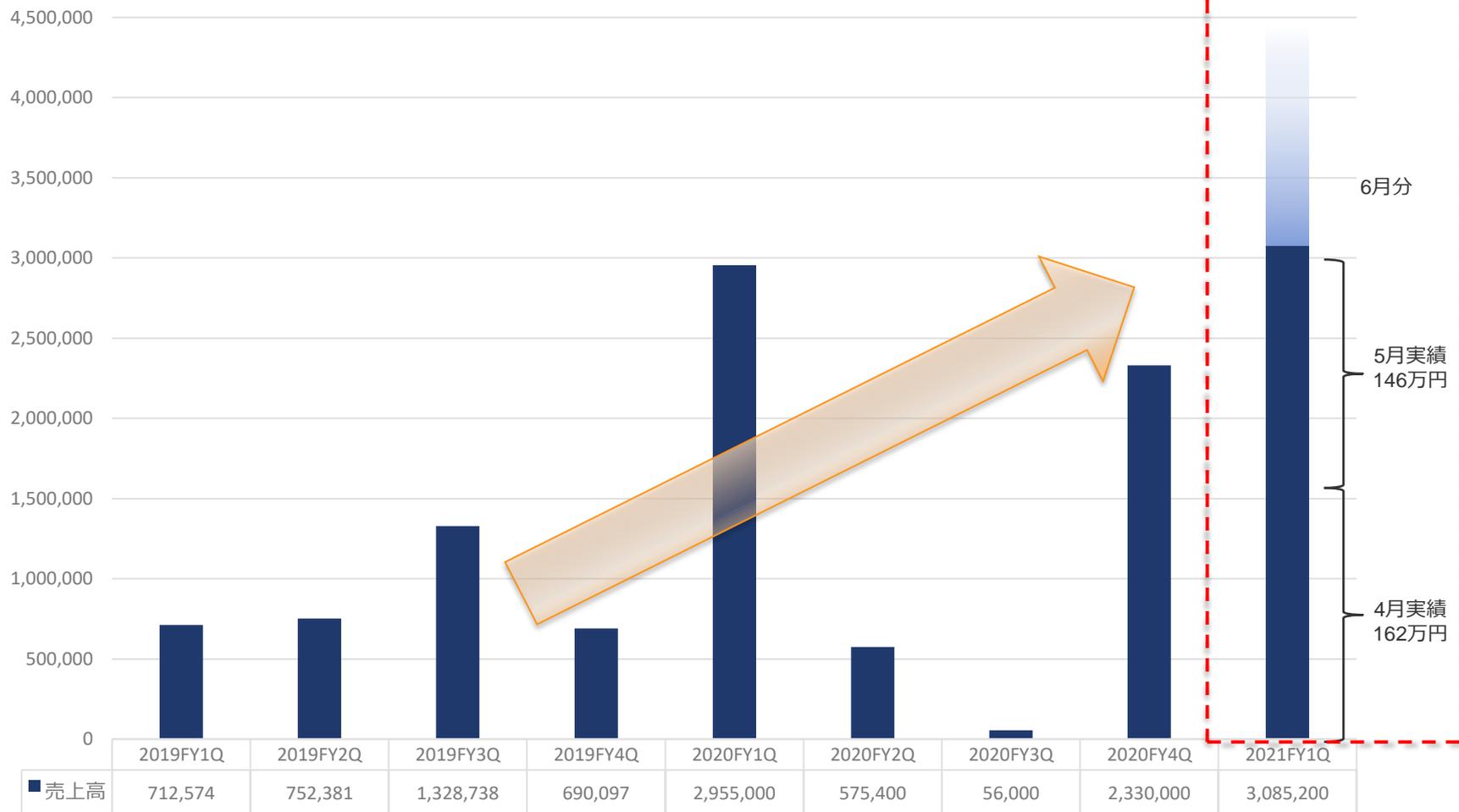


【海外輸出について】

海外向けの輸出はまだ小規模ながら、香港市場を中心として順調に拡大。
2022年3月期第1Qは、4月～5月の2か月で四半期ベースでの過去最高をすでに更新。

(単位：円)

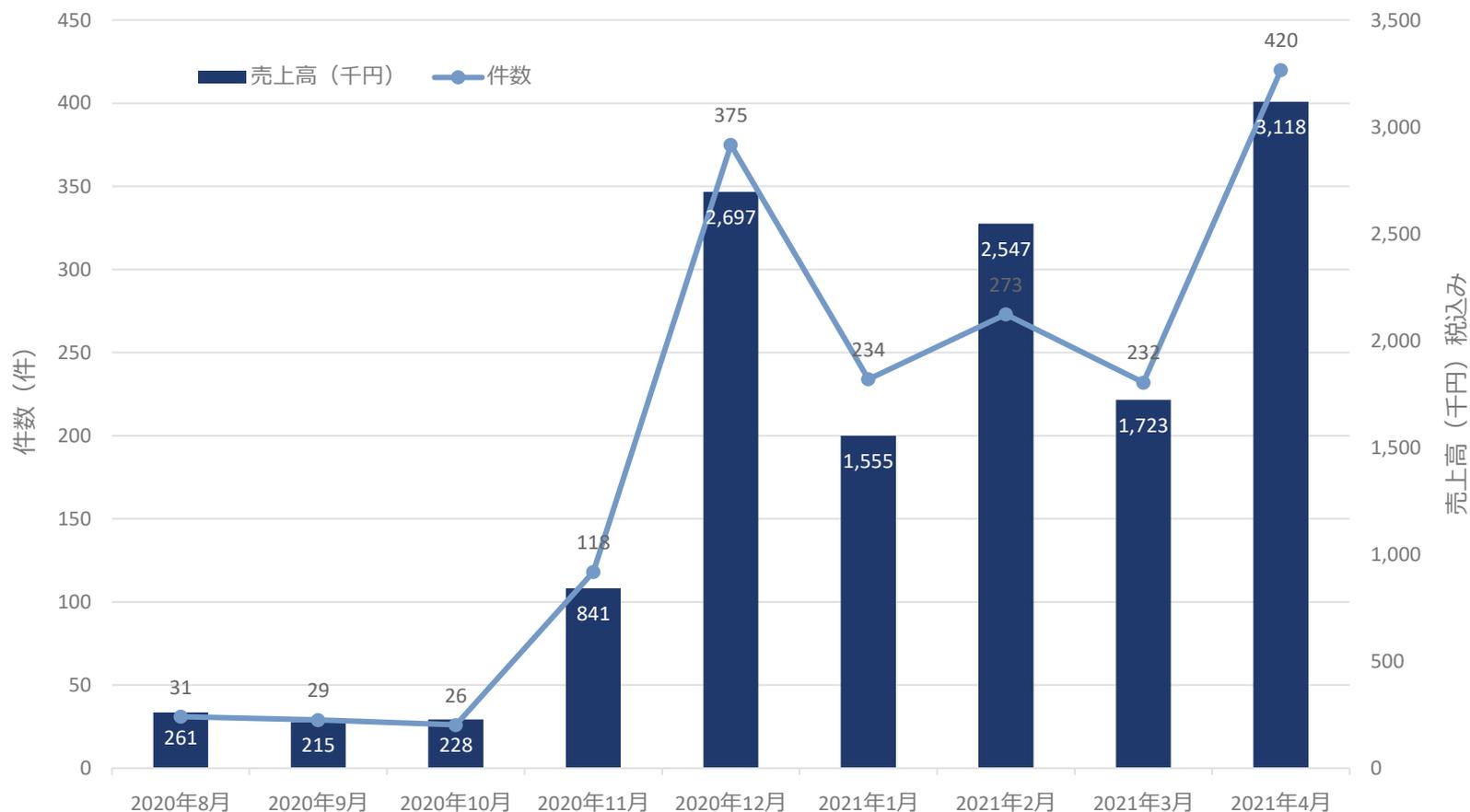
海外輸出売上高（四半期推移）



【EC通販サイトについて】

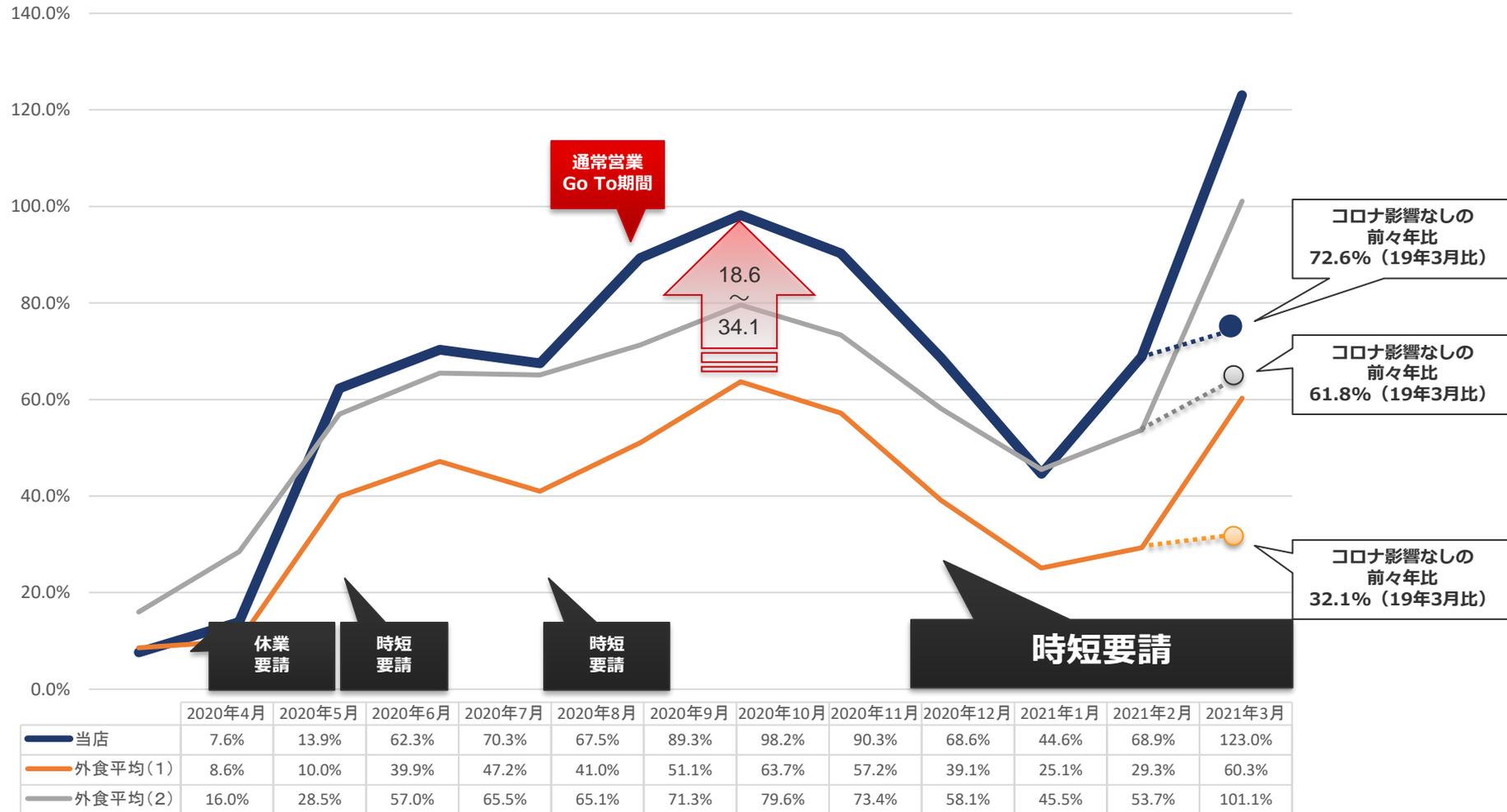
金額的にはまだ小さいながら、受注件数、金額とも順調に拡大。コロナ禍における新たな販売チャネルの多角化により、今後の収益力の拡大を目指す。

EC通販事業（受注ベース）



既存店前年比（コロナ禍、業界平均値比較）

通期にわたって断続的に続いた時短営業の影響は大きいですが、一旦通常営業に戻った9月～11月では、業界平均より、18.6pt～34.1pt 売上の戻り率が高いことを確認。コロナ禍からの回復に向けて好材料。



(注) 「外食平均(1)」：パブレストラン/居酒屋、「外食平均(2)」：ディナーレストラン 【いずれも、一般社団法人日本フードサービス協会のデータより】

2. 今後の取り組みについて



2022年3月期のコロナ禍の経営戦略の見込み

コロナ禍に臨機応変に対応しつつ、再成長へ向けた取り組み

方針	重点施策	達成見込み	
コロナ禍で継続する『守りの取り組み』	コストコントロールの徹底	◎	前期に引き続き、推進
再成長に向けた『攻めの取り組み』	「EC通販の強化」など販売チャネルの多角化	○	前期に引き続き、推進
	店舗事業の収益拡大	△	コロナ禍の状況次第。「緊急事態宣言」などが明ければ、戻りは同業他社より早いものと想定
	国内卸売事業の収益拡大	△	
	海外輸出事業の収益拡大	△	海外のコロナの状況次第
	加工事業による収益貢献	◎	受託事業を開始。損益改善に一定の貢献を見込む。
	店舗事業のITを活用しての効率化	○	前期に引き続き、推進
	陸上養殖のアタラナイ牡蠣のローンチ	△	順調に実証実験が進み、年末お披露目予定

3. 2022年3月期 業績見通しについて



通期業績の見通しについて

現時点では通期業績の合理的な見積りが困難なため、2022年3月期の連結業績予想は「未定」とし、今後見通しが立った時点で速やかに公表させていただきます。

(百万円)	2021年3月期 通期実績	2022年3月期 連結業績予想	前年同期比 (%)
売上高	2,338	未定	-
営業利益	▲359		-
経常利益	▲367		-
当期純利益	▲641		-

※新型コロナウイルスの影響の見通しが立たず、現時点での業績予想は「未定」とさせていただきます。



General Oyster

本資料に記載されている予測、見通し、戦略およびその他歴史的事実ではないものは、当グループが資料作成時点で入手可能な情報を基としており、その情報の正確性を保証するものではありません。これらは経済環境、経営環境の変動などにより、予想と大きく異なる可能性があります。